

### 代替医療の現状

大森隆史（大森内科院長）

21世紀を目前にして、現代医学は遺伝子レベルでの高度な技術を手中に収め、臨床現場での応用も散見されるようになりました。現代医学、西洋医学は生命の不思議を遺伝子DNAという化学暗号で解釈し、ヒトゲノム計画では人間存在もすべて遺伝子で説明できるかのようです。しかし、その一方で難治性のガン、アレルギー疾患、自己免疫疾患などが人間の健康の前に今なお、立ちはだかっているのも事実です。

これまでの西洋医学の進歩は、科学的、客観的を第一に、生命現象をより単純化してそのメカニズムを解き明かし、そこから得られた理論をもとに再現性を重要視してきました。

複雑な系では、正確な解析が困難になるため、反応系をより単純にして、ある種の物質のみに着目して、その周囲の環境は常に一定であることを前提に研究が進められました。これにより、ある程度の暗闇は明らかになりましたが、それ以上、特に臨床の場では理論通りに進まないことが多々あります。

この原因として、幾つかの点が指摘されるでしょうが、一つ挙げれば、これまでの医学、医療が反応物質中心の科学であったからだと考えられます。複雑な生体内反応を一つの物質のみに着目して解釈しても限界があります。

生体内で日々行われている生化学反応は、生体の反応場（血液中の水分子を溶媒として）が存在するところでのみ反応物質の衝突、反応が可能となるのです。

一方、東洋医学を中心とする医療、これは代替医療とも呼びかえられますが、これらの医学、医療は、生体という複雑系を丸ごと、そのままとして捉えてきました。西洋医学のような近代的技術が存在しなかったからかも知れませんが、根本的思想として始めから生命を統合体として捉えていたのです。

20世紀の科学技術の進歩と裏腹にある、医学、医療における各種疾患の難治化と言う袋小路に向かう閉塞感は、今こそ代替医療という新しいパラダイムによってしか克服できません。

物質反応のみでなく、物質を取り巻く霧囲「気」というエネルギー場、反応場に目を向けた医療を今こそ考える時限にきています。